

日本植民地統治期の台湾人YMCA運動史試論

高井ヘラー 由紀

はじめに：本論文の背景と問題意識

戦前の東アジアにおけるキリスト教青年会（Young Men's Christian Association, 以下YMCA）運動は、1880年代以降の日本、中国、朝鮮地域を中心に、北米YMCAの支援を受けながら展開していった。19世紀半ばからの約一世紀間、近代化に伴ってめまぐるしく変化する政治的社会的状況の中、いかにキリスト教青年たちが都会の誘惑に屈することなく篤い信仰を保持し、それを広めるための活動を効果的に行うことができるか、そしてその一助となる健全な娯楽をいかに提供するか、が当時の東アジアにおけるYMCA運動にとって、最大の課題であり存在意義でもあったといえる。そのような青年活動への需要は、東アジアにおいて真っ先に近代化を成し遂げた日本においても、また日本による植民地支配や帝国主義的侵略の対象となった朝鮮、中国、台湾においても同様であった。北米福音派キリスト教を經由して東アジアにもたらされた、青年層を主体とするこのパラチャーチ・ムーヴメントは、福音派信仰を運動の基本に据えつつも、教派主義にとらわれない越境的（trans-denominational）性格を有し、青年期特有の爆発的なエネルギーと、それぞれの地域において青年層が敏感に反応するナショナルスティックな政治的感情とを汲み上げる形で展開していったところに、大きな特徴があった。

東アジアにおけるYMCA運動を特徴づけていた今ひとつの要素として、東京という都市が一つの中心となって展開された点が挙げられる。これは、東京が20世紀初頭から、中国・朝鮮・台湾などからの留学生を大量に受け入れる「国際」都市であったことと関連しており、これらの留学生を対象とするYMCAの働きが、東京に派遣されたYMCA宣教師の中でも特別な注目と期待を受けながら、独自に展開されたためである。周知の中華基督教青年会や朝鮮基督教青年会の東京における設立は、このような文脈の中で1906年に実現し、期せずして、中国や朝鮮における民族自決運動の遠隔的拠点となっていった⁽¹⁾。両者より約二十年も遅いものの、在京台湾人留学生の間でも1920年代に「東京台湾基督教青年会」が組織され、1939年に日本YMCA同盟に加入している。

しかしながら、東アジアにおけるYMCA運動のうねるような展開の中で、台湾は一貫して取り残された存在であったと言わなくてはならない。戦前の台湾において唯一正式な認知を受けたYMCA運動は、1898年に台北在住の日本人によって設立され、日本YMCA同盟にも加入していた「台湾YMCA」一団体だけであった。これには、一時的には台湾人も運営に加わったが、結局は日本人中心の活動に終始している。台湾人側の活動としては、1910年代から1920年代を通じて、台北における官立学校、台湾各地の教会、各市などの単位で、諸「青年会」あるいは「YMCA」が次々と活動を展開、1932年になって相互の連携を図るために「台湾基督教青年会聯盟」が結成されたが、いずれも日本YMCA同盟には加入していなかった⁽²⁾。日本による植民地支配あるいは軍事的侵略に先立って現地YMCAが設立され、戦前を通じて北米YMCAからの強い関心と「支援」とを受けていた朝鮮や中国との比較でいえば、台湾は、日本統治開始以降数年後に初めて現地人によるYMCA活動が開始されたためか、完全に北米YMCAの関心外にあった。東京台湾基督教青年会もまた、北米YMCA宣教師にとっての大き

な関心事であった留日中華基督教青年会や東京朝鮮基督教青年会とは異なり、極端とっていいほど、報告や書簡に全く言及を見ず、完全に彼らの眼中から抜け落ちた存在であった。

このように、戦前における台湾人主体のYMCA運動は⁽³⁾、北米YMCAからの認知を受けず、1939年以降の東京台湾基督教青年会を除いて日本YMCA同盟にも加入していなかったことに加え、戦後になって関連史料を喪失するという不幸な事態も手伝って⁽⁴⁾、これまでの東アジア地域におけるYMCA史研究および台湾史（キリスト教史を含む）研究において完全に看過されてきた。この事実を踏まえ、本論文では、既存の叙述を批判的に吟味した上で、筆者がこれまでに掘り起こし得た一次史料を検討材料に加え、戦前の台湾人によるYMCA運動史を、可能な限り整理し再構築することを第一の目的とする。その際、運動の中心が台北、台南、東京の三都市にわたっていたことに着目し、青年たちによる台湾—東京間の移動が、この運動の発展に大きな意味を有していたことを意識してゆきたい。ここで、敢えて「YMCA」史ではなく「YMCA運動」史として扱うのは、対象となる一連の活動が正式にYMCA組織として認知されていなかったことにも関係するが、それ以上に、それらの活動が、自らを活動の「主体」たり得ると知った一群の青年たちによる自発的な運動であり、そのような運動体としてのYMCA、ひいてはキリスト教のあり方に、筆者自身が意義を見出すためである。

既存資料の検討

戦前の台湾人YMCA運動に関する先行研究は極めて少なく、鍾啓安編著『台北市中華基督教青年会四十年史』（台北YMCA、1985年）に含まれる「台湾初期基督教青年之活動」（の第三篇第一章第三節、89-98

頁) 以上の内容のものは存在しない⁽⁵⁾。鍾の記述は、主に1985年以前に記された二つの資料、①劉子祥「青年事工的回憶」(台湾教会公報第893号, 1962年9月1日, 4-6頁。原文白話ローマ字台湾語), および②林朝榮「台湾初期YMCA活動史」(『壹葉通訊』第29期, 1984年12月〈原文「参加教会事工的回顧」『瀛光』第120期〉, 1984年6月), を典拠とすると考えられる⁽⁶⁾。これらの文章はいずれも一頁ほどの比較的短いもので、作者である劉子祥および林朝榮は、戦前の台湾人YMCA運動に中心的に関わっており、それぞれ1960年代と1980年代になって、記憶を頼りに当時のYMCA運動についてまとめたと思われる。一次資料のほとんどが失われている現状では、戦前の台湾人YMCA運動に関する事実関係を探る上で極めて貴重であるばかりでなく、関係者の感情を窺い知る上でも有効であるものの、あくまでも回顧文であるため、事実関係については確認作業が不可欠ではある。

いわゆるYMCA運動としての記述は鍾啓安によるものに限られるものの、教会の「青年会活動」(youth activity)として一連の動きをとらえた叙述としては、CPM宣教師ヒュー・マクミラン(Hugh MacMillan, 在台期間1924-1962)著*Then Till Now in Formosa*に含まれる“Taiwan Christian Youth (T.K.C.)”と題された文章も参考になる。

台湾人YMCA運動に関する最も重要な原資料としては、①1927年に組織された「台北台湾学生YMCA」が発行していたとされる定期刊行物、②『台湾基督教青年会 聯盟報』(台湾基督教青年会聯盟発行)、③『台湾教会公報 (*Tai-oan Kau-hoe Kong-po*)』(台湾基督長老教会発行)、の三つが挙げられる。ただし、①は筆者のこれまでの資料調査では見つかっておらず、②については、第二号(1933.7.7)、第三号(1933.10.25)、第四号(1934.1.22)、の三号分が残っているのみで、実際に何号まで発刊されたのかも不明である。③の『台湾教会公報 (*Tai-oan Kau-hoe Kong-po*)』(週刊)は近年復刊される等、台湾キリスト教

史研究者のみならず、広く台湾史研究に従事する者の間でも注目されつつある史料である。台湾人YMCA運動についての関連記事や報告も一定程度含まれると思われるが、白話ローマ字台湾語で表記されているため、1910年代から1940年代の記事すべてに目を通し、該当するものを抜き出して解読する作業にはかなりの時間を要する。したがって、本稿では筆者がウェブサイト等で漢訳を目にし得た記事以外は参照しておらず、詳細な調査は今後の課題としたい。

日本人側のキリスト教刊行物における台湾キリスト教関係への言及は比較的豊富で⁽⁷⁾、YMCAに関するものも存在するが、台湾人YMCA運動の実態を知る上では全く十分ではない。最も参考になるのは、1934年の再刊以降ほぼ全号が残っている台湾YMCA発行の『台湾青年』であり、台湾人YMCA運動への言及はそれほど多くないものの、短い報告などから一定程度、様子を窺い知ることはできる。東京YMCA発行の『開拓者』も同様である。その他、『福音新報』などの日本キリスト教新聞には在台日本人キリスト教に関する言及は多くあるが、台湾人YMCA運動については、上記以上のものは含まれていない。

台湾へ派遣されていた欧米ミッションによる報告資料に関しては、北部台湾の宣教を管轄していたカナダ長老教会ミッション（Canadian Presbyterian Mission, 以下CPM）がYMCA事業に対して比較的強く関心を寄せていたため、1910年代以降、YMCA運動に言及した書信や報告が散見される⁽⁸⁾。特にCPM宣教師ケネス・ダウイ（Kenneth W. Dowie）が名誉主事として台湾YMCAに関わった1910年代後半の数年間には多く、そこから台湾人側のYMCA運動と日本人側のそれとの亀裂を学ぶことができる。台湾南部の宣教を管轄していたイングランド長老教会ミッション（English Presbyterian Mission, 以下EPM）の宣教師たちも「Young People's Society」という表現でYMCA運動を認識しており、その書信および報告に多少の言及が見られる⁽⁹⁾。

一方、北米YMCA本部のアーカイブスとして知られるミネソタ大学図書館カウツ・ファミリーYMCAアーカイブス(Kautz Family YMCA Archives)には、戦前の台湾YMCA運動に関する資料はほぼ皆無である。これは上述のように、北米YMCAが戦後になるまで台湾という存在にまったく関与しなかったためである。

その他、『台湾基督長老教会百年史』(1965)、楊士養著『南台教会史』(1962)、長老教会関係者の回顧録などの二次資料にも、手がかりとなる叙述は若干存在する。

結論として、現段階では台湾YMCA運動史を叙述する上で決め手となる原資料は存在しない。したがって、本稿における台湾YMCA運動史の叙述は、台湾、日本、欧米ミッションの三方向に散在する豊富とはいえない量の報告や言及などを根拠に、大筋を推測しながら枠組みを構築するという、あくまでも試験的な作業となることを断っておきたい。

一、台湾人YMCA運動史の背景と枠組み

戦前の台湾人YMCA運動史を性格付ける諸条件の中でもっとも決定的なものが、日本による植民地支配という政治的前提である。1895年の割譲にいたるまでの台湾におけるプロテスタント・キリスト教宣教は、1860年に天津条約が批准され、清国におけるキリスト教宣教の自由そして台湾の淡水および台南開港が許可されたことによって可能となり、1865年にイングランド長老教会ミッション(EPM)が台湾南部に、1872年にカナダ長老教会ミッション(CPM)が台湾北部において宣教活動を開始している。その後、現地の長老派教会組織として1896年に南部中会、1904年に北部中会が組織された。長老派以外のプロテスタント勢力が台湾に進出するのは日本統治開始以降のことで、同じく長老派の日本基督教会(伝道開始1895年、以下同様)に続き、日本聖公会

(1896年)、日本組合教会(1912年)、日本ホーリネス教会(1926年)、日本救世軍(1928年)、日本メソヂスト教会(1932年)などの日本の諸教派が、台湾各地に教会を設立した。日本教会以外では、1920年代に中国大陸より真耶蘇教会が台湾へ進出し、台湾人信者も多く獲得したホーリネス派と共に、台湾人の間で勢力を伸ばした。

上記の流れの中で、「台湾YMCA」もまた日本経由のキリスト教運動として、割譲間もない1898年、日本人キリスト教徒によって台北において設立されている⁽¹⁰⁾。しかし、その一方で、後述するように、1910年代までには、台湾人キリスト教徒間でもYMCA運動が展開されていた。このように台湾人学生の間でYMCA運動が急速に広まりつつある事態を受けて、CPMは、1908年および1911年に母国カナダ長老教会大会を通して、北米YMCA海外宣教委員会(International Committee)に台湾人YMCAのための主事派遣を要請したが、いずれも聞き入れられることはなかった⁽¹¹⁾。北米YMCAへの支援要請は在台日本人YMCA関係者からもなされ、1913年には、当時台湾YMCA会長であった高橋辰二郎が、台湾人青年を含む台北ひいては台湾全体における働きのために、主事派遣などの支援を提供してほしいと依頼する文書を、海外宣教委員会総主事ジョン・R・モット(John R. Mott)に直接送っている⁽¹²⁾。確かに台湾は1895年以来、日本の植民地ではあったが、CPMにとってはカナダ長老教会の宣教地であり、自分たちと同じ北米のYMCAからの支援を受けて然るべきとの理解があっただろうし、日本人関係者の間でも、アジアにおけるYMCA運動の本家といえる北米YMCAに支援を仰ぐというのが自然な発想であったことは不思議ではない。

しかし、実のところモットは、日本YMCA同盟名誉総主事のフィッシャー(Galen M. Fisher)と共に日本YMCA同盟と朝鮮YMCAとの「合同(“amalgamation”)」を指導した当事者であって、この問題をめぐるフィッシャーと朝鮮YMCA総主事のギレット(Philip Gillet)との

緊張関係に、1906年以來、対処してきた人物でもあった⁽¹³⁾。日本の植民地支配下に入った後の朝鮮で、統治開始以前には中華YMCAとの適合関係において成立していた現地YMCAを、日本「帝国」のYMCAとのいかなる関係において位置付けるかという問題は容易ではなく、国際YMCA組織の頂点にある北米YMCAの介入が問題をさらに複雑にしていた⁽¹⁴⁾。そのような中で、既に1895年以來、日本の植民地であった台湾において台湾人によるYMCA組織が誕生することになったとしても、そこに北米YMCAが介入することは、北米Y—日本Y間、日本Y—台湾Y間、台湾Y—北米Y間いずれの方面においても厄介な問題を引き起こす可能性があるとして十分予測されたはずである。加えて、台湾自体の規模の小ささや、その周囲に対する政治的影響力の弱小なことも、台湾への主事派遣が戦略上、得策ではないとの認識を強める原因となったであろう。

したがって、台湾からの度重なる支援要請にかかわらず北米YMCAからの主事派遣は実現しなかったが、台湾にとっても北米YMCAにとっても「幸運」だったのは、ちょうどこの時期にCPM宣教師として台湾に派遣されようとしていたK. W. ダウイが、カナダのマギル大学にてYMCA主事を約二年間つとめた人物だったことである⁽¹⁵⁾。ダウイは、モットおよびフィッシャーとの協議を経てCPM宣教師として渡台し⁽¹⁶⁾、台湾語と日本語を学習後、1910年代後半よりCPM宣教師兼日本YMCA同盟の名誉主事として台湾YMCAの働きに従事し、台湾人—日本人—西洋人が平等に運営し平等に權益を受けられるところのYMCA事業の改変を試みた。しかしその試みは、台日信徒間の言語的文化的差異、そして「統治者—被統治者」という決定的障壁の前に完全に頓挫、1920年代までには完全に立ち行かなくなり、ダウイ自身も信仰問題をきっかけに宣教師を辞任、「台湾YMCA」は日本人中心の運動に回帰したのである⁽¹⁷⁾。

その後の台湾YMCAの経緯をざっと記すと、日本YMCA同盟より派遣された櫻井齋⁽¹⁸⁾が主事に就任した1920年から1924年の間に、淡水、基隆、新竹、台南、嘉義、高雄の各地に地方部が設立されるなど、日本人キリスト教徒の間に裾野を広げ、会員数も350に達している。1921年以降、夏期学校も定期的に開催していたが、主事不在の十年間で活動は低調になり、近森一貫が主事に就任した1934年より、今度は台湾人キリスト教青年をも巻き込む勢いで活動が盛り上がる。時あたかも、「内台融和」のスローガンが声高に唱えられた時期であり、台湾YMCAでも台北の官立学校（台北帝国大学、台北高等商業学校、台北高校）の学Y関係者（台湾人キリスト教徒を含む）の加入を奨励するとともに、1935年11月には、「一つとならんため」というテーマで台湾全島規模の信徒大親睦会を開催、多数の台湾人キリスト教徒を含む約2000名が参加するという驚くべき結果を見た⁽¹⁹⁾。親睦会のプログラム自体は台湾人側の意向を汲み取ったものとはいいがたく、日本人の間でさえも評価は可否に分かれた。とはいえ、これをきっかけに台北では数年間にわたって小規模の台日信徒交流の会が開催され、限定された関係者の間ではあるが、戦後も継続される台湾人—日本人の壁を越えた親しい交わりが形成されたことは事実である。

以上、台湾人YMCA運動を理解する上で前提となる政治的な枠組みとして、被植民者としての台湾人、日本YMCA同盟加入団体である日本人主導の台湾YMCAの存在、そして北米YMCAによる台湾人YMCAへの不関与、という三つの要素を挙げた。台湾が日本の植民地支配下にある以上、被植民者の立場に置かれた台湾人が主体となって行うところのキリスト教運動には日本以外のキリスト教勢力の支援が不可欠であったが、CPM、EPMのいずれも既存の宣教事業で手一杯な中で、北米YMCAが敢えて台湾に関与しない選択をした時点で、台湾人によるYMCA運動は非常に厳しい立場に置かれていた。それは具体的

には、日本YMCA同盟および日本YMCA同盟に加入している台湾YMCAとどのような関係において自分たちの運動を進めて行くのかという問いであり、このような中で運動として発展するためには、後述するように、日本人YMCAとの距離を保って「民族自決」路線を明確にするか、逆に日本人主導の台湾YMCAと歩調を合わせ、「内台融和」路線を取るか、の二者択一を常に迫られることを意味していたのである。

二、台湾人YMCA運動の台北・台南・東京における展開 (1910年代～1930年代)

戦前の台湾人YMCA運動には、台北、台南、東京の三つの中心点があった。「台北YMCA史」という立場から書かれた鍾啓安、そしてその叙述のもとになった林朝榮の叙述では、台北がいわば一つの中心として意識され、ヒュー・マクミランの叙述では東京が、劉子祥の叙述では台南が、それぞれ運動の中心として意識されている。本項では、それぞれ異なる意味で中心としての機能を有し、相互に刺激し合いながら展開していったとの理解に立ち、1910年代の台北における官立学校における学Yの成立から1930年代の「台湾基督教青年会聯盟」にいたる流れを、構築していく。

①台北における台湾人学生YMCA運動

—台北医専YMCA(1910)から台北台湾学生YMCA(1927)へ—

1910年代の「台北医専YMCA」が台湾人YMCA運動の起点であり、台北における学生YMCA運動の中心でもあったことは、複数の資料より確実である。後に台北学生YMCAがカナダ長老教会ボード宛に認めた書信によれば、その開始は数年遡った1904年とされている⁽²⁰⁾。1910年代の台北医専YMCAを組織したとされるのは嘉義出身の周再福(生

没年不詳)で、後に前橋共愛女学校校長となった周再賜(1888-1969)の兄弟とあるが、その詳しい経歴は不明である⁽²¹⁾。台北医専にYMCAが設立されたことがきっかけとなり、その後の数年間で「学生YMCA」(以下、「学Y」)の動きが他の官立学校にも広がったと考えられ、1914年の時点では台北市内の官立学校(師範学校、農林学校などを含む)すべてにおいて、学Yが存在していた。特に台北医専では学生総数200名中20名が参加していることから⁽²²⁾、1910年代の台湾人学生にとってYMCAは大きな魅力を持つ運動だったと考えられる。しかし、これらの学Yは、他校との交流を奨励しない日本の官立学校の影響からか、それぞれ他の学Yに対して極めて閉鎖的な態度を取る傾向があることがCPM宣教師によって報告されており、相互交流と連帯が大きな課題となっていた⁽²³⁾。

このような中、上述のCPM宣教師ダウイが、1916年の夏、台湾語と日本語の語学学習を終わらせて、台北におけるYMCA主事としての活動を開始した。その主な活動は、YMCA会館を拠点とした夜間英語学校や英語聖書研究会の指導であったが、台湾人学Yの連帯と組織化を念頭に置くCPMの期待を受けて⁽²⁴⁾、医専を含む官立学生たちとの接触も試みている。ただし、YMCAに関する台湾人による記述にダウイが登場しないことをみると、学生たちに対するインパクトはさほど大きくなかったと思われる⁽²⁵⁾。その原因の一つは、ダウイ自身が述べているように、CPM宣教師兼YMCA主事としてCPMの業務に追われ、期待していたほどの時間と労力をYMCA事業に注ぐことができなかつたためであろう⁽²⁶⁾。

CPMが1910年代に既にその必要性を指摘していたところの、学Y間の連携が実現するのは、ダウイによる台日協同のYMCA構想が頓挫した後の1925年前後である。上述の台北における学Yは、いったん活動を休止、1927年に蘇振輝、詹添木、楊昭璧などの医専学生によって再

開され、同時に台北市内の各中学・高校・大学・専門学校の台湾学生にも声をかけ、「台北台湾学生YMCA」と改称されたと、林朝榮は記述している⁽²⁷⁾。これは、1925年1月より、医学学校の学生たちを中心として毎週聖書研究が行われていたとするCPM宣教師ヒュー・マクミランの回想とは若干時期は食い違っているが⁽²⁸⁾、医専を中心とした諸学校の学生が協同で活動したという点では一致している。さらに林によれば、このグループは聖書研究のみならず、合唱、野外礼拝、教会奉仕、夏期学校開催、討論会、座談会、宗教劇、クリスマス祝会を行い、さらに巡回の講演会や伝道集会などを開催するなど、諸集会を盛んに行っていた。重要なのは会誌も発行していたとあることだが、その存在は未だ確認されていない。このように活動は盛んだったものの、日本YMCA同盟には加入せず、1932年の台湾基督教青年会聯盟発足の際に、加入メンバーとなっている。

指導者としては、マクミラン以外に、陳溪川（雙蓮教会牧師）、故ウィリアム・ゴールドCPM宣教師夫人（Margaret Mellis Gauld）、陳瓊琚（淡水中学教師）、早坂一郎（台北帝大教授）、横川定（医学専門学校教授のちに台北帝大教授）、今崎秀一（台北第二中学教授）、石本岩根（高等学校教師）、上與二郎（台北日基教会牧師）、原忠雄（台北組合教会牧師）、大橋麟太郎（台北聖公会司祭）など、欧米宣教師や台湾人牧師・中学教員以外に、日本人の大学および中高教員・牧師も関与していた。いわば、台湾人学生の主体的エネルギーを吸収しつつ、日本人主導のYMCAとも足並みを揃える形での展開だったといえる。

1920年代以降の台北では、日本人学生の間でも学Yがかなり活発になっていたようである。1921年末には日本人中心の「医専青年会」が成立、横川定が理事長、錦織某が中心となって活動を開始⁽²⁹⁾、翌1922年5月17日に台北組合教会で開催された第一回総会では⁽³⁰⁾、横川をはじめ、高木友枝（台湾総督府医院長兼台湾総督府医学校長）、近藤十郎

(台湾総督府営繕課長)、吉田担蔵(医師)、津崎孝道(台北医専解剖学教授)らが祝辞を行っている。これらのうち大半が、台湾人キリスト教徒と積極的に交流した人物であったことから、日本語を使用言語とする日本人中心の活動だったものの、台湾人学生も自然に加わっていたものと考えられる。

林朝榮も、当時の台北では台北帝大、台北高商、台北高校に日本人中心のYMCAが存在し、自身1920年代後半から1930年代前半にかけて、高校および帝大学Yに参加していたと述べている。この時期までには、個々の学Yは日本人中心のものとなっていたため、台湾人青年が台湾語で自由に活動できたのは「台北台湾学生YMCA」のみだったと理解される。

1934年に近森一貫を主事に迎えた日本人中心の台湾YMCAが、全島規模で台湾人を取り込もうと試みたことについては既に述べたが、台北に限ってみると、1936年、日本人YMCA関係者と台北台湾学生YMCAとの「連合クリスマス」が行われており、その後、内台連合の「学生YMCA連合」が成立したとされている⁽³¹⁾。これが台湾人学生側にとっても同様に「連合」として受け取られたかどうかは疑わしいものの、台湾人学生も多くが慕っていた日本人キリスト者教員の台湾YMCAへの関与、1920年代後半以降の台北における台湾人学生の日本語使用能力が一定程度に達していたこと、日本人と台湾人との人口比がほぼ半々だった事実などを鑑みると、学生レベルに限ってみれば、台湾人青年がさほど抵抗を感じずに台湾YMCA関係の活動に関わる素地が整っていたということが、大方の傾向としていえるだろう。

一方、1933年、大稻埕長老教会の李天来、李超然、余約束、陳啓賢、余約全、陳朝宗、林朝榮らが中心となって、市内の長老教会(艋舺、大稻埕、雙蓮など)関係者および大稻埕ホーリネス教会伝道者林天生などに声をかけて結成された台北基督教青年会(台北YMCA)は、学生

YMCAより一層台湾人主導の色彩の強い活動で、やはり台湾YMCA聯盟に加入している。このグループは「第一劇場」付近にあった李天来医師宅を活動拠点として集まり、聖書研究、集会、聖歌隊練習などを行っていた⁽³²⁾。1933年11月、台湾YMCA聯盟に加盟⁽³³⁾、『聯盟報』2号(1933年7月)に掲載された広告頁には、委員として李天来(委員長)、李超然(副委員長)、余約束、林耀宗、余約全、陳啓賢、陳朝宗、郭和銅、の名前が記載されている。

その後の活動で明らかになっていることは、1935年の台湾中部大地震の際に募金および救済活動に尽力したこと程度であり、1941年11月に李天来が出征したことにより活動の場を失ったと思われ、さらに翌年1942年1月に李が戦死したため、台北YMCAも立ち消えになった。しかし、戦後、これらの台北YMCA関係者のうち数名が中心となり、新生「台北市YMCA」を立ち上げている⁽³⁴⁾。

②台南における台湾基督教青年会聯盟の発足(1932)

1) 台南基督教青年会から台湾基督教青年会聯盟へ

日本人側との歩み寄りが不可避だった台北の状況に対して、日本人YMCAの影響がほぼ皆無の台南で展開された動きは、相当異なるものであった。既に1920年代初頭、台南では、東京帝国大学にて学士号を取得し、台南長老教中学にて教頭を務めていた林茂生(1887-1947)が中心となり、台南太平洋教会の協力を得て「台南基督教青年会」を設立している⁽³⁵⁾。林柏維はこれを、台湾議會設置運動の母体といえる台湾文化協会(1921年設立、1927年分裂)の影響を受けて設立され、活動内容や組織形態において台湾文化協会を模倣していた多くの台湾人青年団体のうちの一つとして挙げている⁽³⁶⁾。林茂生が同協会評議員に選ばれ、協会主催の夏季学校の教師をつとめていたことから⁽³⁷⁾、台南基督教青年会が文化協会の色彩を色濃く反映していたとしても不思議では

なかった。「基督教青年会」という名称を使用しつつも、キリスト者中心の民族文化啓蒙運動の受け皿となる側面が強かったのではないかと推測される⁽³⁸⁾。

一方、1921年12月には、プリンストン大学出身のB. R. プレス (B. R. Press) が「YMCA教師」として台南（長老教中学と思われる）に赴任したが、直後インフルエンザに倒れ、ミッション病院における最善の治療にもかかわらず、1922年1月4日に他界している⁽³⁹⁾。その後、同様の人事は実現しなかったものの、マクミランの記述では、長老教中学内での生徒によるキリスト教活動が活発だったとあることから⁽⁴⁰⁾、そのような活動の主事として、当時の長老教中学校長であったEPM宣教師エドワード・バンド (Edward Band) および林茂生らが、プレスを雇用しようとしたものと考えられる。

台南に限らず、1920年代から30年代にかけては、台湾長老教会指導者の間で、青年層の間に「基督教青年会」（あるいは「教会YMCA」）を組織し、聖書研究などの活動を行うことを励ます必要があるとの認識が広がっていた。林朝燦によれば、これは台湾人青年たちが日本教育を通して唯物論などの新しい思想に「毒され」つつあることに対して、教会指導者たちが危機感を募らせていたことに起因していた⁽⁴¹⁾。このような動きを背景として、1929年6月、台湾において初めての、キリスト教青年を対象とする夏季学校が台南長老教中学を会場として開催されたのである。

バンドの回想によれば、この夏季学校は蔡培火（1889-1983）、高德章（1904-1941）とバンド自身の三人の話し合いから生まれたもので、彼らは、既に制度化されている組織を持ち込んだり、教会指導層の価値観を青年層に押しつけるのではなく、青年自身がまさに主体となって青年のための活動を行う、そのような運動として夏季学校を構想したのであった。そのときに考え出されたテーマには、キリスト教の本質、キリスト

教と近代思想、キリスト教の女性に対する影響、聖書の価値と起源、キリストの唯一性、などがあった⁽⁴²⁾。この年の夏季学校がきっかけとなり、その後も毎年、長老教中学を会場として、蔡培火、林茂生、高德章らキリスト教知識人を講師とする夏季学校を開催、それによって教会青年たちの信仰を守り、青年層の相互連結を強化しようとしたのであった⁽⁴³⁾。

これらは、本来ならば既にYMCA運動の顧問レベルである年齢層の者たちによって、主軸となるはずの青年層を刺激するために行われた活動であった。1887年生まれのエドワード・林茂生、1889年生まれの蔡培火に対し、夏季学校に参加する側の青年は一回り近くも若かったと思われるが、彼らは未だ「受動的」に参加していたにすぎず、そのような意味で、この時期は青年会史における「前史」だったのである⁽⁴⁴⁾。

しかし、以上の動きが確実に導火線となり、林茂生らより一代若きキリスト者青年層が「受動」から「主導」に転じて運動を担うようになった転換点で、1932年8月の台湾基督教青年聯盟（以下、聯盟）の発足であった⁽⁴⁵⁾。この聯盟は、同年3月に開催された長老教会台湾大会第16回における、各教会YMCA創設推進の決議に呼応して⁽⁴⁶⁾、多くの教会においてYMCAが組織されたことを受けた動きであると考えられる。太平洋教会の青年を中心とした発足ではあったが、台湾長老教会間の南北の壁を超えて、台湾全島および日本内地に存在する三十余の台湾学生青年会および台湾教会青年会（会員累計二千名以上）の相互連結と連結強化とを促すことを目的としていた⁽⁴⁷⁾。

この聯盟が台北ではなく台南を拠点として発足されたことは単なる偶然ではない。台南は、日本統治以前の行政や文化の中心であったのみならず、プロテスタント宣教において北部よりも教勢において勝る南部教会の本拠地でもあった。加えて日本人の台湾人に対する人口比が約1：10と、台北に比して極端に少ないため、日本人教会や日本人YMCAと歩調を合わせる必要が最小限だったことが、台湾人自身の希求する

YMCA運動のあり方や、台湾人主体の諸YMCAの連携という構想を可能にし、それを島内の台湾人キリスト教青年たちへ発信するにいたったと説明できる。無論、民族自決主義に立脚する政治運動家の林茂生および蔡培火の初期の台南YMCA活動への関与が、聯盟の民族自決主義的路線に大きく寄与したであろうことも想像に難くない。

台南YMCA創設当時より協力を提供してきた太平境教会が、台湾人青年主導のYMCA聯盟誕生の場となった要因はいくつも存在するが、その一つに、高德章の存在が挙げられる。高は、明治学院神学部への留学期間中に後述する東京台湾基督教青年会を創設、1927年に太平境教会伝道師および日曜学校校長に着任し、台南YMCA夏季学校講師として指導にあたるなど、台湾人主導のYMCA運動について、豊富な経験と明確なビジョンを有していたと思われる。1928年には台南神学校の教師に任ぜられたが、同年台南市内の各教会学校および各青年会を統合して設立された「台南基督教会青年会」⁽⁴⁸⁾、そして1932年の聯盟創設の背後には、高による教会青年たちへの感化が少なからずあっただろう。

さらに、1930年代当時の太平境教会は、日本内地留学から戻ってきた青年や、長老教中学および女学校を卒業した青少年層が非常に多く集っており、日曜学校にしても、六つの分校を有し生徒数は1200名にのぼっていたというから、教会自体が若者に溢れて活気に満ち、新しいものを生み出す気運を有していたといえる⁽⁴⁹⁾。

1932年8月3日の発会式は、東京、台北、宜蘭、豊原（台中市）、鹽水（台南縣）、台南の六団体の青年会から十名の代表が参加して行われている。翌4日、第一次委員会として、廖継春が委員長、顔春和および劉子祥（1907-1988）が庶務委員、黄受惠および林朝榮（1910-1985）が会計委員として選出された⁽⁵⁰⁾。しかし、全島規模でのキリスト教青年層の連帯を目的とするこの聯盟の誕生は、母体である南部長老教会からは、教会と対立する可能性を持つ青年運動として、強い警戒感をもって

受け止められている⁽⁵¹⁾。1933年3月の南部台湾基督長老教会大会第二回南部教会大会では、特に聯盟について話し合うために、「青年会合一機関の研究部会」が設置され、高金聲（牧師）、林拳龍（林獻堂長男）、蘇振輝（医師）、顔春和、劉子祥、潘道榮（牧師）、高天成（高金聲長男で医学博士）、鄭溪畔（牧師）、李道明、林朝榮の十名が部員に選ばれた。さらに同年7月の南部伝教師総会でも、「論青年会」という題目の下に青年会と教会の関係についての議論がなされている⁽⁵²⁾。とはいえ、前者部会委員の半数近くは同年聯盟総会で委員に選ばれた者であり、後者の伝教師総会での議論にも、高德章をはじめ聯盟顧問となる者が多く発言していることを鑑みても、基本的には聯盟の趣旨に理解を示そうとする方向で議論の場が設けられたと考えて良いだろう。

その後、1933年8月の第二回聯盟総会において、劉子祥、顔春和、鄭蒼國、廖継春、黄永昌、林朝榮、黄受惠、高天成、周瓊琳の十名が委員に選ばれ、そのうち劉子祥が委員長長の任を終戦時まで担うこととなった⁽⁵³⁾。台南市出身の劉は、九歳の頃より内地へ留学し、慶應義塾大学に学んだ人物である。日本滞在中は日本のYMCA活動に熱心に参加し、1929年返台後は父劉瑞山の事業を手伝いつつ、太平境教会日曜学校長・聖歌隊指揮・青年会会長をつとめるほか、南部台湾教会や台南長老教中学・女学の理事職などを次々と歴任した、台湾教会の重鎮的存在であった。一方、政治にも積極的に関与し、台湾地方自治聯盟（1930-37）の常務理事・同台南州支部主幹をつとめ、地方自治制度改革時にも台南第一屆民選市議会議員への当選を果たすなど、多彩な活動を行っている⁽⁵⁴⁾。

初期台南YMCAの指導者であった林茂生および蔡培火に引き続き、劉子祥もまた政治運動に関与しているという現実、長老教会をして、YMCA（青年会）は政治運動なのではないかという疑念をも抱かせることともなり、『聯盟報』では、その弁明のために青年会と政治運動というテーマに対して紙面を割き、YMCAは政治団体ではないが、

その会員個人が政治運動家であることは、他国のYMCA関係者の事例を鑑みても決して不自然なことではない云々と、説明している⁽⁵⁵⁾。確かに台湾YMCA聯盟そのものは、政治運動に関与することも、特定の政治運動の支持基盤になることもなかった。しかし、林獻堂の長男林挙龍が顧問に名を連ね⁽⁵⁶⁾、劉子祥がたびたび林獻堂の兄弟である林烈堂から寄付を受けていたことを鑑みれば⁽⁵⁷⁾、政治運動の人脈が聯盟の存続に重要な意味を有していたことは明らかである。このテーマについては、今後、別稿で詳しく論じることとしたい。

こうして誕生した聯盟にとって最も重要な活動は、夏季学校の開催であった。これは、1933年8月、淡水台北神学校を会場に、台湾学生基督教青年会主催・台湾基督教青年会聯盟後援というかたちで開催された「淡水基督青年夏季学校」を先駆けとして⁽⁵⁸⁾、翌1934年から1940年までの計7回、彰化教会、台南神学院、淡水女子中学、台中柳原教会と、会場を変えて行われている⁽⁵⁹⁾。1933年こそ参加者は四十二名にとどまったものの、その後、台湾全島そして日本内地より百数十名から二百名が参加するといった盛況ぶりで、これらの青年たちが一週間から十日間、共同生活を営みつつ、著名なキリスト教指導者による講演に耳を傾け、グループ・ディスカッションや聖書研究などを行ったのであった。生活を共にすることによって参加者同士の連帯は強められ、これらの夏季学校で刺激を受けた青年たちが、その後、教会教職者や指導者として活躍するようになるにつれ、それまで青年の存在を重要視してこなかった長老教会関係者は青年運動への理解を深め、教会に革新の風が吹き込むこととなったのである。しかし、1937年頃より植民地当局の圧力が増し、柳原教会で開催された1940年の夏季学校を最後として、聯盟による活動は実質的に中止に追い込まれていった。なお、同年、聯盟の名称は「台湾基督教会青年聯盟」に改称している（傍点筆者）⁽⁶⁰⁾。

聯盟主催夏季学校の最大の意義は、1912年に南北合一大会を組織し

ながらも実質的な合一を果たせずにいた南部および北部長老教会に対し、両教会出身の青年たちが共同生活を通して直接に親しい関係を築いたことにある。聯盟への加入団体は、第二回総会の時点でも未だ東京、台南、豊原、宜蘭、台北学生（のち台湾学生）、鹽水、丈八斗（彰化縣二林鎮）のみで、翌年には鹽水が脱退するというハプニングさえあったが⁽⁶¹⁾、1935年までには、元来全島で四十あった台湾人YMCAが十二になったと報告されており、その後二十以上の団体が加入したものと思われる⁽⁶²⁾。そして、これらの青年たちが実際に会おう場が、夏季学校だったのであった。

2) 聯盟加入YMCAの実際

1934年までに加入していた東京、台南、豊原、宜蘭、台湾学生、鹽水、丈八斗各YMCAに関しては、『聯盟報』に記載された報告から、若干の詳細が明らかにされている⁽⁶³⁾。

「台湾学生YMCA」（実質的には台北にほぼ限定されていた）に関しては、1933年の時点で誕生から既に三十周年であると報告されている⁽⁶⁴⁾。上述のように、林朝榮の回顧では、活動開始は1910年前後、後年の台湾学生YMCAによるカナダ長老教会ミッションボード宛の書信では1904年とされるなど、理解は前後しているが、いずれしても、台湾人YMCA活動として最も早期に開始されたことは間違いない。

それ以外の都市YMCAの創立年は、東京が1928年、台南が1929年、鹽水1932年6月、丈八斗青年会が1932年11月、1933年の台北基督教青年会、と続く。豊原および宜蘭に関しては不明である。この時点では未加入であるものの、上述の1932年の台湾大会決議により設立されたYMCAとして、旗後（1932年3月創設、会員54名）、斗六（1932年6月創設、会員32名）などが挙げられる⁽⁶⁵⁾。既述のように、これらの「YMCA」はいずれも、外部との繋がりでいえば、北米からも日本から

も認知を受けていない故にYMCAとは定義できない団体であった。しかし、おそらく在京台湾キリスト教青年たちは、東京朝鮮YMCAおよび東京中華YMCAと擬似的な存在として自らを認識し、運動体から組織体になる必要性を認識してあえて「創立」したものと思われ、それが台湾島内の諸青会へ連動していったと推測される。

活動の内容はさまざまであったが、概して聖書研究、集会（含クリスマス祝会）、伝道活動、遠足、運動、聖歌隊練習などの音楽活動、社会奉仕活動などのうちのいくつかを行っており、教職者を招くこともあったものの、基本的には青年たち自身が計画し、活動を行ったものであった。ただし、教会の理解を得るための努力は怠らず、丈八斗では「敬老会」と称して教会の長老を招いたり、青年会総会に教会教職者・長老執事・会員などを招くなどする中で、最初は青年会に反対していた教会の人々が祈りなどを通して支援するようになったと報告されている。活動の拠点となる会館を持たず、しばしば教会を使用、台北では委員長である李天来医師宅を拠点としていた。最も規模の大きかった東京では、会館建設が現実味を帯びた計画として話し合われたが、実現はしていない。

3) 台湾YMCA聯盟と台湾YMCA

台湾YMCA聯盟は、最終的にすべての台湾人YMCAグループを取り込むことはできなかったものの、三分の二以上のグループが加入を果たしたことを鑑みれば、台湾人キリスト教青年の連帯という意味では画期的であり、大きなうねりを台湾キリスト教界内にもたらしたことは明らかである。この動きに違和感を抱いたのは、上述のように第一には台湾長老教会指導層であったが、別の意味で強い違和感を抱いたのが台北に拠点をおく日本人の「台湾YMCA」であった。特に、1934年の主事就任以来、台湾YMCA主導のキリスト教青年「内台融和」化を明確に構想していた近森一貫とその周辺の一部の関係者にとって、台湾人自身

が南部を拠点としてYMCAの名の下に連帯することは、決して好ましいことではなかった。また、前述のように、日本YMCA同盟に加入していた台湾YMCAに対し、台湾YMCA聯盟はどこからもYMCAとしての認知を受けていない、「自称」YMCAの団体であった。近森一貫は、この点について、陳溪圳とともに劉子祥を訪れ、「YMCA」という名称を用いることへの懸念を表明している。しかし、劉子祥は逆に、「自分たちはあなた方がこの聯盟に加入することを期待しているのである」と応じ、相手を驚かせた、と回顧している⁽⁶⁶⁾。

無論、日本人YMCA（台湾YMCA、各学Yなど）で台湾YMCA聯盟に加入した団体はなかったが、日本人のYMCA関係者のうちにも台湾YMCA聯盟の動きに理解を示す者は比較的多くあったようである。劉子祥は横川、早坂、金關丈夫（台北医専教授、後に台北帝国大学教授）などの名前を挙げており⁽⁶⁷⁾、それ以外にも多くの日本人教職者・指導者が夏季学校講師などとして協力を提供している。朝鮮YMCAと日本YMCAとの「連合」YMCAが成立した1938年にも⁽⁶⁸⁾、台湾YMCAの理事会では台湾YMCA聯盟が懇談の話題にあがったが、特に合同を目指すという方向の議論ではなかったと見受けられ、その後、台湾YMCAが聯盟を取り込むために具体的に動いたことを示す報告は見当たらない⁽⁶⁹⁾。

③東京台湾基督教青年会

1) 概略

マクミランによると、1920年代、台湾島外にあって台湾島内の台湾人YMCA運動を牽引する役割を果たしたのは、東京台湾基督教青年会および京都にあった類似の青年会であった⁽⁷⁰⁾。しかしながら、それほど重要性を有し、また、1930年台には2000名前後だった台湾出身の内地留学生のうち、150名ほども参加していたとされるほど盛んな運動

だったにもかかわらず⁽⁷¹⁾、東京台湾基督教青年会に関する一次資料は極めて少ない。京都については、下記に言及する『メッセンジャー』誌以外、皆無である⁽⁷²⁾。事実関係などを確認するためには、今後、関係者へのインタビューや、より多方面にわたる資料調査が不可欠であるが、本稿では、あくまでも試験的な作業として、東京台湾教会ウェブサイトおよび『聯盟報』第2-4号を主な典拠とし、東京台湾基督教青年会の概略をたどることとする。

日本内地における台湾キリスト教青年の「YMCA」活動に言及した最も古い資料は、英国長老教会発行『メッセンジャー (*The Messenger*)』誌1912年3月号に掲載された記事「日本在住の台湾人留学生」(“Formosan Students in Japan”)である。この中に引用されたEPM宣教師W. バークレイ (William Barclay) の報告によると、台湾人学生たちは東京および京都双方において「YMCA」を結成しており、毎日曜日、他の台湾人留学生を積極的に誘って集会を行っていたとある。掲載された写真には、マツカイ娘婿で北部台湾長老教会牧師の陳清義 (1877-1942)、林茂生、廖三重 (1886-1914) を含む十数名が写っている。

会の中心となっていた廖三重は、明治学院を経て早稲田大学で学び、1910年前後、陳清義と共に「高砂基督教青年会」を結成したが、上述の記事が発表された同年に脳病を発症し、療養のため帰台を余儀なくされている⁽⁷³⁾。廖の帰台に伴って同会の活動は下火になったものと思われる。東京台湾基督教青年会の始まりとされる1925年頃まで、同様の活動は存在しなかったと考えられる。

1925年に再び台湾人青年たちが基督教青年会を始めることになったきっかけは、日本内地で語学を学習していたと思われる台湾派遣宣教師「ミス・ゴールド」を中心として、台湾教会青年が集まったことであった⁽⁷⁴⁾。その後、15～20名の台湾人留学生在が毎晩7時から東中野にある

顔春芳一家の自宅に集い、明治学院神学生の劉振芳・呉克昌（あるいは呉昌盛）・高德章らの指導のもと、賛美歌を歌い聖書研究などを行っていた。自宅を提供した顔春芳は、明治大学で法学を学び、1920年代に東京において『台湾青年』発刊母体であった台湾新民会に所属していた人物で、帰台後は台南市議会議員にも当選している。集っていたメンバーの中には、戦後、台湾人として初めて日本の文学博士を取得した民族社会学者の呉主恵や、翁徳操、呉天命らがいた。

その後、1927年秋には明治学院神学部の教室を借りて、毎日曜日午後、2時から2時30分までは祈り会、2時30分より礼拝という形で、台湾留学生の集会を行うようになった。

翌1928年1月、「東京台湾基督教青年会」として正式に発起、発起人は顔春芳および高天成であった⁽⁷⁵⁾。後者の高天成は、後に台湾YMCA聯盟でも活躍した人物である。既に高德章および劉振芳は、台湾へ戻って台南太平境および柳原教会に赴任しており、それぞれの教会の青年会活動を指導していたものと思われる。台北、豊原なども、東京台湾基督教青年会に関わった青年たちが、帰台後に活動を指導したケースであった。反対に、1920年代末から1930年代にかけて台湾におけるYMCA運動が盛んになるにつれ、東京へ赴く青年たちの中にも、既に台湾における青年会活動で経験を積んだ者が増えていった。

1920年代末当時の東京台湾基督教青年会の説教者は、袁新枝、鄭蒼国、高端莊、謝榮華、汪修文、陳明清、劉主安、呉主恵などで、その後、黄主義、郭和烈、許鴻謨らも加わり、三年後には50名を超える留学生集会となったとされる。

1932年の台湾YMCA聯盟創立時には加入団体となるが、同年、福岡にも台湾基督教青年会が設立されている⁽⁷⁶⁾。

1934年10月には、郭馬西（1892-1966）が東京台湾基督教青年会の正式な初代宗教部主事として就任した。郭は台湾教会関係者で初めて海外

で神学を修め、戦前の台湾人YMCA運動を通じて、唯一、専任主事として働いた人物である。聯盟も台湾長老教会も財政的に決して潤沢ではなかったことから、東京台湾基督教青年会自身が主事を招聘したと思われる。郭馬西の主事就任以降、会は更に活気を増し、参加者は急増、二年後には100名に達したという⁽⁷⁷⁾。場所が手狭になったため、1935年、日本基督教会角筈教会（新宿—大久保付近）を借りることになったが、建物のいたみが激しく使用できる状態ではなかったため、植村環（後に台南長栄女中の校長を兼任）が主任牧師をつとめる柏木教会に居を移した。ただし黄彰輝の回顧録によると、1934年頃には新宿の日本神学校校舎の教室を借りて、日曜日午後に礼拝を行っていたとある⁽⁷⁸⁾。いずれにしても、新宿周辺で礼拝していたということであろう。1934年から1940年の郭馬西主事時代が、戦前の東京台湾基督教青年会にとっての最盛期であった。

その後の詳しい経緯は不明であるが、1939年11月、東京台湾基督教青年会は日本YMCA同盟に加入している⁽⁷⁹⁾。そして翌1940年、郭馬西は辞任、無牧になった東京台湾基督教青年会は、日本人牧師を礼拝に招いたり、台湾から研修に来ていた牧師らの協力を得て、活動を続けていった。一方、郭馬西は日本に残って教会設立を画策しようとしたようであるが、時代的制約もあって実現しなかったようである。

早稲田など複数の学校に所属する留学生が中心的に集っていた東京台湾基督教青年会は、全体として「学Y」的色彩が強い団体として開始したものの、中心的活動は礼拝や祈り会、聖書研究などであり、青年会そのものが彼らの教会でもあるという側面を有していた。しかし中には青年会だけでは飽き足らず、日本の教会（柏木教会など）に所属した者もいた。戦後、社会人が多くなった関係者たちの間で、青年会としての性格を脱して台湾人教会の設立が志向されたのは、ごく自然の流れであった。注目すべきは、戦前、向山寮という名称のキリスト教宿舎を有して

いたことであるが、これについては資料がほとんどなく、詳細は一切不明である。

2) 東京台湾基督教青年会の置かれた文脈

近年、戦前アジア人留学生に関する研究はさまざまな方面で進んでおり、台湾人留学生に関する研究や中華基督教青年会、朝鮮基督教青年会に関する研究なども増えてきていることから⁽⁸⁰⁾、東京台湾基督教青年会というテーマも、在京留学生研究というコンテキストにおいて、より本格的に研究調査されるべきものである。

周知のように、植民地統治期の台湾における教育政策下、台湾北部の淡水中学および淡水女学校、南部の台南長老教中学および台南長老教女学はいずれも中学としての認可を受けておらず、高等教育機関（神学校、あるいは高等学校から大学へのコース）への進学を目指す教会関係者の子弟たちは、中学卒業資格を得るために、同志社、明治学院、青山学院などの中等部に入ることを余儀なくされていた。これら台湾教会関係者の子弟たちにとって、日本留学の目的は主に、牧師の資格を得るため、神学の研鑽のため、大学進学のため、欧米留学のステップアップとして、などであったが、1910年代までは朝鮮や中国留学生に比して人数は少なく、20世紀以降に誕生した若者が留学する年代となった1920年代に2000名を越え、1930年代以降にピークを迎えている⁽⁸¹⁾。

当時より、東アジア出身の留学生にとって一番良い留学先は米国であり、日本は「二流」との意識があったとは指摘されるものの⁽⁸²⁾、東京は確かに東アジアにおける一つの学問的文化的「中心」であり、台湾以外にも中国および韓国などから多くの青年が留学していた。台湾出身の留学生にとっても、東京に限らず、内地留学は、台湾では学ぶことの出来ない自由主義的な神学思想や、社会主義などの政治思想に触れる機会でもあった。当時、在台日本人は「台湾留学生は内地留学後、排日論者

になる」傾向があると嘆いたといわれるが⁽⁸³⁾、植民地よりも政治的に自由な内地において、台湾を外から眺めることにより、台湾人の置かれている不当な政治的地位に気付き、自決意識に目覚めることは、ごく自然な成り行きであった。

台湾人キリスト教青年の中にも『台湾青年』出版母体の台湾民政会（後に台湾新民会）に関わった者もあり⁽⁸⁴⁾、議会設置運動などの一連の政治運動において中心的役割を担った上述の蔡培火も、しばしば東京台湾基督教青年会を訪れている⁽⁸⁵⁾。「東京おばさん」との愛称で台湾出身の留学生に親しまれた廖蔡綉鸞（1905~65）は、戦前の東京台湾基督教青年会を支えた存在であったが⁽⁸⁶⁾、夫の廖温仁（1893-1936）は、台湾独立運動の先駆者であった廖文奎（本名廖温魁，1906-1952）および戦後台湾共和国臨時政府の大統領となった廖文毅（1910-86）の兄であり、廖蔡綉鸞もまた、戦後は台湾に戻り長男と共に独立運動に身を投じている。このように、戦前の在京台湾人キリスト教青年にとって、政治と信仰の距離は決して遠いものではなかった。これは、特に戦後の台湾基督長老教会の民主化運動との関わりのルーツを考察する上で、重要となってくる経験であろう。

三、台湾人YMCA運動の意義と問題点

以上の、台北、台南、東京の三地点を軸として展開した台湾人青年によるYMCA運動は、蔡培火や林茂生ら台湾人知識人をはじめ、英加宣教師、また台湾人主導のYMCA運動に理解を示す日本人YMCA関係者の精神的支援を糧として、既存の教会主導ではなし得なかった青年活動を、主体的創造的に行ったものであった。YMCAという名称を用いつつも、北米YMCAや日本YMCA同盟との関わりを持たない彼らの運動モデルは、英加長老派宣教師を通して学んだところの、英国の学生

キリスト教運動（Student Christian Movement）やカナダ長老派の青年運動などにあったようである⁽⁸⁷⁾。スポーツや福祉活動を重要視する通常のYMCA活動に対し、台湾人のYMCA運動は、信仰問題を中心とするプログラムに重点を置き、どちらかといえば教会の活動を補完、あるいは教会に新風を吹き込むという目的意識を有しており、また実際そのような役割を果たしたものであった。

1920年代以降の台湾教会で、このような動きが青年層の共感を得て広まった背景には、日本教育を受けたエリート青年層に対し、伝道者を養成する神学教育の水準が十分ではないために、教会が青年層を知的に満足させることができず⁽⁸⁸⁾、教会もまた青年層を評価しないといった、教会指導者層と青年層との間の深刻なギャップがあった。そのような中、YMCA運動は、当時の日本内地や韓国でもそうであったように、キリスト教青年が宣教師の呈示する信仰と政治の枠組みを超えて、より自由に政治的、信仰的にももの考えることを可能にし、それによって教会と青年との橋渡しをしたと説明できる⁽⁸⁹⁾。たとえば夏季学校では、蔡培火や林茂生らがキリスト教と近代思想、キリスト教と社会問題などの諸テーマについての講演を行うことによって、キリスト教青年たちを知的にも満足させることができ⁽⁹⁰⁾、そこで新たな知見や仲間を得た青年たちが、自らの教会の革新に対して大きな関心を持ち、その成果やエネルギーを教会に還元していくというパターンにつながっていった。このような流れの中で、台湾YMCA聯盟も教会機構内の青年会聯盟という性格を強く有することとなり、戦後のT.K.C.（台湾教会青年会）運動へと継続されて行った。この点において、台湾人YMCA運動のパラチャーチ・ムーヴメントとしての性格は弱かったと指摘できる。

これを別の角度から説明するならば、北米YMCAの認知を受けられず、日本YMCA同盟の傘下に入ることを嫌った台湾人YMCA運動は、「YMCA」という名称を用いてはいたものの、公の組織でない以上、そ

の活動範囲を本来のYMCA運動に見られるような「社会」に広く設定することはできず、最終的には台湾人が主体的に活動することが可能である唯一の空間、すなわち欧米宣教師の支援と保護の下にある教会の枠組み内に限定するほかなかった、ともいえる。

確かに、台湾人キリスト教青年たちは、自らの信仰的・政治的・民族的主体性をもって、青年期のエネルギーをYMCA運動に注ぎ込んだのであり、その台湾キリスト教史への影響は計り知れないものがある。戦後の台湾独立運動などの政治運動への影響も相当に大きなものがあると思われる。しかし、上述の理由によるとはいえ、運動のエネルギーが社会よりは教会の革新という方向へ向けられ、その範囲内におさまっていたことは、たとえば韓国との比較において考えるならば、結果的には植民地統治当局との共存を意識したあり方ではあった。

とはいえ、劉子祥をはじめとする関係者が、あくまでも「台湾YMCA」(日本人)への対抗姿勢をつらぬき⁽⁹¹⁾、「内台」キリスト教青年の連帯ではなく、「台湾人」同士の連帯という点にこだわったことは、当時の台湾における政治事情では容易なことではなかった。これは推測の域を出ないが、1940年に聯盟の名称が「台湾基督教青年聯盟」(すなわち台湾YMCA聯盟)から「台湾基督教会青年聯盟」に変わったのは、YMCAという名称を取りやめることによって、日本YMCA同盟に取り込まれることを避けるための動きだったとも考えられるのである。

このような「対抗」姿勢を前面に出すのが、劉子祥に代表される台湾南部の教会関係者に典型的なあり方だったとすれば、北部においては、台湾人YMCAと日本人YMCAの接近に見られるような、「妥協」の姿勢がより典型的であった。それもまた、民族自決主義の一つのあり方だったと解釈できるのであるが、当時の状況では、「対抗」か「妥協」かという問いは、その後の台湾キリスト教長老教会の存続を左右する、また南北台湾長老教会両者の亀裂を一層深刻にする問題となってゆき、

最終的に1944年に「日本基督教台湾教団」というかたちで成立した、南北台湾教会と日本人教会との合同問題にも繋がっていくのである⁽⁹²⁾。が、ここではただ、台湾人が連帯して日本人に「対抗」するためには、宣教師に代表される欧米勢力によるバックアップが不可欠であり、1940年の宣教師国外追放と、同年を境に台湾YMCA聯盟が実質的に活動休止に入ったこととは全く無関係ではないということのみを指摘するにとどめておく。

おわりにかえて：戦前から戦後への連続性

台湾という植民地社会においては「被植民者」であり、硬直した教会政治の中では「若者」と軽視されがちだった台湾人キリスト教青年たちが、自ら活動の主体となり、自分自身と他者に変革をもたらす動力となり得た事件、それが戦前の台湾人YMCA運動であった。

通常は教派、民族、言語、地域などの違いによって分派していくプロテスタンティズムの中であって、YMCA運動はその柔軟性ゆえにこれらの分断要素を越境し、世界を横断するかたちで広く青年層の共感を呼んだ。しかし、それぞれの地域の青年たちを主体として展開するキリスト教運動である一方、北米を頂点とするグローバル・ヒエラルキーとしての顔を持つYMCA組織は、国際政治のヘゲモニーから完全に自由ではあり得なかった。戦前の台湾人青年YMCA運動が、日本YMCAから完全に自立した形で台湾人主体の運動として存続するためには、北米YMCAと直接つながるか、正式には認知されない運動体であり続けることを選択するかの二者択一であったが、前者の選択肢が存在しない以上、後者の道を選ばざるを得なかったのは、そのためである。組織としてのYMCAは植民地支配という体制を超えることはできないというパラドクスが、戦前台湾のコンテキストにおいて如実に示されていたとい

えよう。

そして戦後、日本人が引き揚げた後の台湾では、戦前にYMCA運動に関わった関係者が中心となって、1946年「台北市YMCA」を設立、中華YMCAによって正式に認知を受けた。しかしながら、中国本土からの国民党関係者の台湾へのなだれ込みに伴い、中華YMCA関係者と協同で活動することを余儀なくされ、「台北市中華YMCA」と改称、台湾人主体のYMCAから、「中華YMCA」化を余儀なくされてゆく。ここにもまた、組織体としてのYMCAのパラドクスが見られるのであるが、この問題については今後改めて論じることとしたい。

表1 文中で言及した台湾人YMCA運動関係者

氏名	生没年	経歴	関連したYMCA
周再福	生没年不詳	嘉義出身。周再賜(1888-1969, 前橋共愛女学校校長)の兄弟(林朝榮「台湾初期YMCA活動史」)	台北医専YMCA 発起人 (1910年代)
蘇振輝	1907-1997	台中后里郷出身。蘇育才牧師長男。台北医専を経て、九州大学医学博士。彰化市にて開業。彰化基督教院院長、同理事長、彰化基督長老教會長老、台湾省医師公会理事長などを歴任。日本時代の台湾で参議院、戦後は台湾省省議員もつとめた。(頼永祥長老史料庫)	台北台湾学生YMCA (1920年代)
詹添木	1905-1962	台南州出身。1930年に台北医専卒業後、日本赤十字社日本赤十字社支部病院勤務を経て、1931年淡水郡三芝庄で開業。1933年、台北州基隆郡にて『黎元醫院』を開設。後に嘉義台湾省立医院院長、嘉義西門長老教会長老。(台湾大学典藏數位化計画HP, 頼永祥長老史料庫)	台北台湾学生YMCA (1920年代)

楊昭璧	1908-1966	台北医専卒業後、1932年竹山にて「竹山醫院」を開設。1941年、台中州医師公會竹山郡支部支部長に任じられ、戦後は台中縣醫師公會理事、常務理事、南投縣議會議長、同縣長などを歴任。(南投縣醫師公會HP)	台北台湾学生YMCA (1920年代)
李天來	1893-1942	1917年總督府立医学校卒。元大稻埕教会牧師李壬水の次男。馬偕医院、ボルネオ勤務を経て、1933年台北にて「同仁医院」を開業。1941年より馬偕医院院長もつとめた。日本時代の改正名は稲田天來。(賴永祥長老史料庫)	台北YMCA 委員長
李超然	1910-1992	台北大稻埕出身。李春生の曾孫。淡水中学卒業後、上海、ドイツ・ベルリン工科大学、ベルギー工芸大学にて学ぶ。1932年の帰台後、台湾總督府警務局および中央研究所に勤務。戦後は新亞香科株式会社常務取締役、台湾農産株式会社常務取締役兼董事部長、台湾土地建設株式会社専務取締役などを歴任。戦後直後に台湾基督長老教会北部大会より派遣され、林茂生、杜聰明と共に淡水中学校、女学校の接収にもあたった。(賴永祥長老史料庫)	台北YMCA 副委員長
余約束	1888-1974	台北市出身。廈門英華書院卒業。父余傳臚の寶香齋餅店業を引き継ぐ。大稻埕教會の長老を歴任。1940年に郭乞生、李天來、陳啓賢と共に三重埔教會を開設し、同教會の長老をつとめる。1956年、大橋教會の開設にもかかわる。(賴永祥長老史料庫)	台北YMCA 委員
余約全	1907-没年不詳	余約束の弟	台北YMCA 委員

日本植民地統治期の台湾人YMCA 運動史試論

陳啓賢	1889-1993	淡水中学卒。汽車修理工，石炭業，米行商などに従事。(頼永祥長老史料庫)	台北 YMCA 委員
陳朝宗	生没年不詳		台北 YMCA 委員
林朝榮	1910-1985	豊原出身。台北帝国大学にて地質学を専攻。同大理学部副手，台陽鉱業株式会社地質技師などをつとめ，1937年より山西省鉱務局勤務。後に長春工業大学，北京大学，北平師範大学にて教鞭をとる。戦後は台湾大学にて地質学教授。長老教会 TKC 総幹事もつとめた。(台湾大百科全書，頼永祥長老史料庫)	台北 YMCA 委員 台湾 YMCA 聯盟委員
林耀宗	生没年不詳	後に長老教会長老(頼永祥長老史料庫)	台北 YMCA 委員
郭和銅	生没年不詳	社子庄(社仔)郭清廉長男。後に真耶蘇教会に入信。(頼永祥長老史料庫)	台北 YMCA 委員
呉天知	生没年不詳		台北 YMCA 委員
蔡培火	1889-1983	台南市出身の政治家。東京高等師範学校卒。東京で新民会，台湾青年会を結成し，『台湾青年』を発行。1921年台湾で台湾文化協会を設立。のち同協会が左翼化すると，台湾地方自治連盟を結成し，台湾議会設置運動などを指導した。第二次大戦後は中国国民党員となり，台湾の立法委員などを歴任。(台湾基督教大観，1958等)	台南 YMCA 指導者
林茂生	1887-1947	台南出身。台南長老教中学，同志社中学，第三高等学校を経て，東京帝国大学卒。長老教中学教頭を経て，1927年台湾総督府の公費でコロンビア大学留学，台湾人として初めてのPh.D.取得。1935年，台南高等工業学校教授。戦後は台湾大学教授に就任するが，二二八事件にて処刑される。	台南 YMCA 指導者

高徳章	1904-1941	岡山出身。台南長老教中学から明治学院中学および神学部を経て、1927年太平洋境教会伝道師および日曜学校長に任ぜられる。1928年より台南神学院教師。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会創始者、台南YMCA指導者
廖繼春	1902-1976	台中豊原出身の油彩画家。台北国語学校卒。豊原公学校教師を経て、東京美術学校に学んだ後、1927年より台南長老教中学および台南一中教師。戦後、台湾師範大学教授。(台湾大百科全書、頼永祥長老史料庫)	台湾YMCA聯盟委員(委員長)
顔春和	1907-没年不詳	台南市出身。顔春芳の弟。1926年明治大学法学部卒。東京にて11年間弁護士をした後、1933年に台南にて開業。戦後は台北にて弁護士として活躍。(『台湾基督教大観』、同志社台湾校友の姻親ネットワークHP)	台湾YMCA聯盟委員、戦後台北YMCA発起人
劉子祥	1907-1988	台南市出身。東京三田〔御田〕小学から慶應義塾大学卒。太平洋教会日曜学校長・聖歌隊指揮・青年会会長、南部長老教会大会常置委員・事業局長、台南中会医療部長・財務部長・慈善部長、台湾教会公報社理事長、長栄中学校および女学校の理事、長老教会南中部長などを歴任。台湾地方自治聯盟の常務理事・同台南州支部主辦をつとめた。(『劉子祥先生事略』、『壹葉通訊』145号(1988年4月)；劉克全編『永遠的劉瑞山』(2004年)、頼永祥長老史料庫)	台湾YMCA聯盟委員(委員長)
黄受惠	1898-1985	台南市出身。台南神学院卒。伝道師として数年働いた後、日本歯科大学で学び、台南で歯科医として開業。台南太平洋境教会執事・長老、日曜学校長、長栄女子中学理事などを歴任。(台湾基督教大観、1958；頼永祥長老史料庫)	台湾YMCA聯盟委員

日本植民地統治期の台湾人YMCA 運動史試論

鄭蒼國	1902-1992	苑裡出身。台北神学校，日本神学校を経て，1930年より宜蘭教会伝道師。陳溪圳とともに北部教改革新運動（新人運動）の中核を担う。（頼永祥長老史料庫）	台湾YMCA聯盟委員，東京台湾基督教青年会
黄永昌	生没年不詳	医師	台湾YMCA 聯盟委員
高天成	1904-1964	台南長老教中学出身，同志社中学，第八高等學校を経て，東京帝大医学部に於いて細菌学の医学博士号を取得。南京の同仁會南京医院に派遣され，外科主任として働く。戦後はいったん日本に戻るが，請われて台湾医学院教授をつとめ，台湾大学病院院長などを歴任した（頼永祥長老史料庫）。	台湾YMCA聯盟委員，東京台湾基督教青年会 1928年発起人
周瓊琳	生没年不詳		台湾YMCA 聯盟委員
劉振芳	1897-1969	台南神学校出身。1927年に明治学院神学部卒業後，台中柳原教会牧師就任。米国オーバーン（Auburn）神学校留学。台中教会牧師，高雄中會舊城教會牧師等を経て，1962-1969年，東京台湾教会牧師。1938年には台湾YMCAの派遣により廈門視察にも赴いている。（頼永祥長老史料庫，『台湾青年』110，1938年9月5日）	東京台湾基督教青年会創始者
呉克昌 (呉昌盛?)		1933年までには故人	東京台湾基督教青年会創始者
顔春芳		顔春和の兄。同志社中学を経て明治大学法学部卒。日本統治期の台南市議會議員に当選。台南で名医として知られた顔振聲の息子。『台湾青年』発刊母体の台湾新民会にも所属。（同志社台湾校友的姻親網絡HP「台湾新民会」HP）	東京台湾基督教青年会創始者・1928年発起人

呉天命	1901-1960	桃園縣出身。淡水中学，台北神学校，明治学院神学部で学び，1928年より台北神学校教師。戦後は台湾神学院教授，済南教会牧師，北部大会議長，台湾神学院院長などを歴任。（台湾基督教大観，台湾基督長老教会済南教会HP）	東京台湾基督教青年会
呉主恵	1907-1994	台湾雲林縣土庫鎮出身。台湾人として初めて日本の文学博士を取得した（1954年）民族社会学者。台中州立第一中学校，廈門大学を経て，早稲田大学に留学。日本神学校でも学ぶ。早稲田大学教授，中華交通学院（名古屋）院長，東洋大学教授などを歴任。1969年，呉主恵博士文物陳列館を雲林縣土庫基督教會に設立。著作多数。（呉主恵『教育と研究』）	東京台湾基督教青年会
翁徳操	生没年不詳		東京台湾基督教青年会
袁新枝	生没年不詳	台北市出身。日本神学校卒。東勢教会，鳳林教会，羅東教会，板橋教会，西門教会の牧師，台北聖經学院講師を歴任（『台湾基督教大観』1958年）	東京台湾基督教青年会
高瑞莊	1903-1944	台南縣頭社教会にて生まれる。父は牧師の高篤行，祖父は台湾で最初に受洗し最初の伝道者となった高長。台南長老教中学，台北神学校を経て，東京神学社に留学。台東教会，中壠教会を経て，花蓮教会牧師。日本当局によって禁止されていた先住民伝道を試みたため官憲より目を付けられ，戦争末期に強制労働に駆り出され，41才の若さで永眠。（頼永祥長老史料庫）	東京台湾基督教青年会
謝栄華	生没年不詳		東京台湾基督教青年会

日本植民地統治期の台湾人YMCA 運動史試論

汪修文	生没年 不詳	中江修一と改称し森田久子と結婚。父は牧師の汪培英。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会
陳明清	1903- 1964	台南縣關仔嶺出身。台南長老教中学、青山学院中等部を経て、中央大学法学部卒。非日本人としてはじめて日本の高等司法試験に合格。1941年台湾へ戻り、新竹地方院院長、台湾高等法院を経て台南にて弁護士として開業。戦後台湾におけるキリスト教大学の設立に尽力する。1951-1963年任長榮中學理事長。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会
劉主安	1905- 1994	台南市出身。兄の劉青雲と共に日本へ渡り、同志社小学部、慶応義塾幼稚舎、青山学院中学部を経て、東京高等工業学校、後に東京工業大学に学び優秀な成績で卒業。台南長老教女学校の物理および化学教師をつとめ、台南神学院でも教鞭をとる。長榮女子高級中學榮譽校長、太平境馬雅各紀念教會終身長老。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会
黄主義	1905- 1989	台南縣出身。台南長老教中学、台南神学校を経て、1936年東京神学社卒業。霧峰教会牧師を経て台南神学校にて教鞭をとる傍ら、日本基督台南教会(日本人教会)の協力牧師もつとめる。1940年台南神学校閉鎖に伴い、北上して台北神学校教師。開拓伝道にも従事。戦後は斗六教会牧師、台南神学院および台湾神学院教師、台湾各地での開拓伝道に従事するが、1970年に渡米し、米国における台湾人教会開拓および牧会に専念した。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会

郭和烈	1906-1974	台北縣出身。1935年東京神学社卒。頭城教会，大甲三重埔教会，中壢教会を経て，台北神学校教師。戦後は済南教会牧師を経て，台湾神学院教師，北部大会議長などを歴任。(台湾基督長老教会済南教会HP)	東京台湾基督教青年会
許鴻謨	1906-1978	彰化縣出身。淡水中学在学中に献身を決意し，台北神学校に学ぶ。その間に一年日本神学校に留学。東海岸で伝道を開始，富里，大甲，新市，和美，清水，台南東門，二林，済南などの各教会および台北博愛医院などで伝道に従事。1971年からは台湾YMCA会長もつとめた。(頼永祥長老史料庫)	東京台湾基督教青年会
郭馬西	1892-1966	淡水中学から同志社中等学校，明治学院神学部を経て，米国コロンビア大学合同神学校に留学。台北神学校教授，副院長，東京台湾基督教青年会宗教主事を歴任。1945年，日本国籍を失ったため，帰台し台北の中山教会牧師。(頼永祥長老史料庫，ご子息インタビュー)	東京台湾基督教青年会宗教主事
陳溪圳	1895-1990	雙蓮教会牧師	台北台湾学生YMCA指導者
Margaret Mellis Gauld		故ウィリアム・ゴールドCPM宣教師夫人	台北台湾学生YMCA指導者
陳瓊瑤	1894-1945	台中州出身。淡水牛津学院，同志社中学を経て，同志社大学部英文学科卒。私立淡水中学，台北神学校・女子学院の英語教師などをつとめ，北部台湾基督長老教會主日學部會委員，淡水教會長老，主日学校校長，台中州東勢郡東勢街下新台幣農林資源合名会社総経	台北台湾学生YMCA指導者

日本植民地統治期の台湾人YMCA 運動史試論

		理，台北市龍門工業合資会社主事などを歴任。『マッカイ博士略伝』の著者。（楊建成「京都同志社大學部英文學科畢 主日學校校長 陳瓊琚」Yahoo!奇魔部落格，頼永祥長老史料庫）	
早坂一郎	1891-1977	台北帝大教授，台北日本基督教会会員	台北台湾学生YMCA 指導者，台北帝大YMCA
横川定	1883-1957	医学専門学校教授のちに台北帝大教授，台北組合教会員	1920年代医専青年会，台北台湾学生YMCA 指導者，
今崎秀一	生没年不詳	第二中学？教授	台北台湾学生YMCA 指導者
石本岩根	生没年不詳	高等学校教師	台北台湾学生YMCA 指導者，台北高校YMCA
上與二郎	1884-1984	台北日基教会牧師	台北台湾学生YMCA 指導者
原忠雄	生没年不詳	台北組合教会牧師	台北台湾学生YMCA 指導者
大橋麟太郎	生没年不詳	台北聖公会司祭	台北台湾学生YMCA 指導者
高木友枝	1858-1943	台湾総督府医院長兼台湾総督府医学校長	1920年代医専青年会
近藤十郎	生没年不詳	台湾総督府営繕課長	1920年代医専青年会
吉田担蔵	生没年不詳	医師。台北にて吉田医院を開業。	1920年代医専青年会
津崎孝道	1894-1975	台北医専解剖学教授	1920年代医専青年会

K. W. ダウイ (Kenneth W. Dowie)	生没年 不詳	CPM 宣教師（在台期間 1913-1924）	台湾 YMCA 名誉主事
H. マク ミラン (Hugh MacMillan)	1892- 1970	CPM 宣教師（在台期間 1924-1962）	台北学生 YMCA, 台湾 YMCA 聯盟指 導者

注

- (1) 民族運動の拠点としてではないが、在京の中華基督教青年会史そのものを取り上げたのは唯一の研究として、渡辺祐子「もうひとつの中国人留学生史—中国人日本留学史における中華留日基督教青年会の位置—」（明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第5巻第1号、2011年3月）が挙げられる。東京朝鮮基督教青年会の成立過程およびその在京朝鮮青年の国家主義的意識との関係に関しては、Michael I. Shapiro, *Christian Culture and Military Rule: Assimilation and its Limits during the First Decade of Japan's Colonial Rule in Korea, 1910-19*, Ph.D. dissertation submitted to the UC Berkeley, 2010, 第1および4章に詳しい。
- (2) この原因について、林朝榮は「台湾初期 YMCA 活動史」（「台湾初期 YMCA 活動史」（『壹葉通訊』第29期、1984年12月〈原文「参加教会事工的回顧」』瀛光』第120期）、1984年6月）の中で、これらの運動が、民族アイデンティティに強く立脚していたためと指摘している。
- (3) 本稿で「台湾人」という語を用いる際には、主に閩南語を用いる漢族系台湾人のことを指している。
- (4) 米国マサチューセッツ州在住の台湾教会史家頼永祥博士によると、台湾基督教青年会連盟設立者の一人である劉子祥が保管していた YMCA

関連資料は水害で失われ、現在では台湾人主体のYMCA関連原資料はほぼ残っていないという。

- (5) 筆者は日本YMCA同盟資料室を調査中に、張幸助編集、趙榮發訳「台湾YMCA運動史の簡単な紹介」（年代不詳、三頁）と題する文章を見つけたが、それは鍾による著作の一部を翻訳・編集したものである。また、遡って1956年に出版された『台北中華基督教青年会成立十週年簡史』（慶祝十週年紀念編審委員会編、台北YMCA発行）は、1946年の台北YMCA設立に直接関わる事柄に関する記述が主であり、戦前の歴史にはほとんど言及していない。
- (6) これらの資料を最初に筆者にご教示下さったのは頼永祥博士である。博士は台湾キリスト教史研究の前進のために、膨大な資料を個人で収集・整理・公開（「頼永祥長老史料庫」www.laijohn.com/）しておられるが、筆者にも、筆者の問い合わせに応じて貴重な資料をたびたび送って下さった。このことが、筆者の研究活動の上で非常に大きな助けとなったことを、ここに感謝の気持ちをもって記したい。
- (7) Yuki Takai-Heller, “The Japanese Narrative on Taiwan Church History during the Japanese Colonial Period as Revealed by Japanese Church Periodicals,” forthcoming.
- (8) CPMの台湾関連資料はカナダ・トロント市の The United Church of Canada Archives および The Presbyterian Church in Canada Archives に所収されている。
- (9) EPMの台湾関連資料はロンドン大学SOAS (School of Oriental Studies) 図書館に所収されている。
- (10) 台湾割譲直後の在台日本人キリスト教徒にとってYMCAがどのような意味を持つ運動であったか、また設立後の経緯については、高井ヘラー由紀「植民地統治構造におけるキリスト教とその越境性に関する一考察—1910年代の台湾YMCAとK. W. ダウイを中心に—」（『同志社アメリカ研究』第45号、2009年3月）、43頁、を参照。
- (11) *Minutes of the Foreign Missions Committee, Presbyterian Church of Canada* (以下、FMC Minutes), Vol. XXI (1908-09), 18; Report of the Foreign Missions Committee, *Acts and Proceedings of the General Assembly of the Canadian Presbyterian Church* (以下FMC Report),

1912. Milton Jack to R. P. MacKay, Oct. 14, 1912, PCC Box 4 File 45, UCCA.

- (12) 筆者は2012年4月、米国ミネソタ大学図書館カウツ記念YMCAアーカイブスにおいて資料調査を行った際、台湾関係の資料の中に“From Formosa”と題された日付なしの“Superintendent”による書信を発見、さらに日本関係の資料の中に同書信への返信と思われるフィッシャー (Galen M. Fisher) 書信を見つけ、前者は1913年3月20日付 T. Takahashiからモット宛書信であると判断した。T. Takahashiとは、当時台湾YMCA会長をつとめていた高橋辰二郎 (台湾総督府土木局工事部、元田作之進『基督教週報』第18巻第14号、1908年12月4日にて言及) であると考えられる。(“Superintendent” John R. Mott, “From Formosa,” n. d. YMCA International Work in Taiwan Records; Fisher to Mott, Jul. 4, 1913, Fisher to T. Takahashi, Jul. 3, 1913, attached. Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.)
- (13) この点に関し、筆者は高井ヘラー (2009) において、Jon Davidann, *A World of Crisis and Progress* (Lehigh University Press, 1998) 第5章の記述に基づき、フィッシャーが合同の推進者であったと論じたが (48頁)、フィッシャー自身は、合同はモットの指導によるものであったと報告している。(G. M. Fisher, “Report for Quarter Ending June 30, 1913”; G. M. Fisher, “Annual Report of the Year Ending Sept. 30, 1913.” Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.)
- (14) 日韓併合前後の朝鮮YMCAは中華YMCA、北米YMCA、日本YMCA同盟三者との関係において非常に微妙な立場に置かれていた。この点に関しては、前掲Shapiro 博士論文 (2010) において詳しく論じられている。
- (15) ダウイが台湾へ派遣されることになった時期と、フィッシャーがモットに代わって高橋へ返信を送った時期とは重なっている。
- (16) Dowie to Armstrong, June 30, 1913, PCC Box 4, File 47, UCCA.
- (17) 1910年代における台日協同YMCAへの試みと挫折、その後の台湾YMCAの展開、そして1930年に入ってから、YMCAを拠点とする日

本人主導の「内台融和」運動については、高井ヘラー由紀「日本統治下台湾のキリスト教界における異文化交流—台湾YMCAの事例を中心に—」（『アジアにおける異文化交流』ICU創立50周年記念国際会議／飛田良文ほか編、明治書院、2004年3月、210-233頁）、および同（2009）などにおいて詳しく論じている。

- (18) 櫻井齋（生没年不詳）：主事辞任後も台南に在住し、信用組合事業で成功をおさめた（『台湾青年』56号、1934年3月15日）。
- (19) 同親睦会に関しては高井ヘラー（2004）を参照。
- (20) Letter from Taiwan Student Young Men's Christian Association to Canadian Presbyterian Mission, Sept. 3, 1931 (Presbyterian Church in Taiwan Box 3 File 101-D-31, Presbyterian Church in Canada Archives).
- (21) 林朝榮「台湾初期YMCA活動史」。
- (22) A. A. Gray to R. P. MacKay, May 15, 1914, Presbyterian Church in Canada Box 4 File 52, in United Church of Canada Archives, Presbyterian Church in Canada. Board of Missions fonds, Correspondence pertaining to the Formosa missions, 122/7. (以下それぞれPCC, UCCA)
- (23) 同上。
- (24) Memorandum, Milton Jack, Apr. 20, 1914, PCC Box 4 File 52, UCCA; W. Gauld to A. E. Armstrong, Jan. 6, 1915, PCC Box 4 File 55, UCCA.
- (25) 台湾基督長老教会では、ダウイは淡江中學體育館、淡江中學八角塔校舎、艋舺教堂などのキリスト教建築物を設計した人物として宣教師として記念されている（蘇文魁「令人懷念的建築家羅慶益宣教士」《台湾教会公報》2476期 1999年8月15日 p.11。頼永祥長老史料庫より）
- (26) Dowie's report, Apr. 15, 1917; Letter from Dowie to R. P. MacKay, May 6, 1918; FMC Minutes, Vol. XXXI (1918-19), 7.
- (27) 林朝榮「台湾初期YMCA活動史」。
- (28) Hugh MacMillan, "Taiwan YMCA Recollections"（『台北中華基督教青年会成立十週年簡史』慶祝十週年紀念編審委員會編、台北YMCA発行、8-9）。
- (29) 相良朝彦「台湾素通り期」（『開拓者』17:4、1922年4月）。

- (30) 「台湾医専基督教青年会」(『開拓者』17:8, 1922年8月)。ここでは理事長をはじめとする関係者の名前はすべて日本人のものである。ただし、台湾人青年に対して理解を有する日本人医師や教師がかかわり、吉田の祝辞においても「吾人は神の子なり、総てが平等なり、同権なり、故に今後内台人相提携して信仰に進み聖旨を心として相互の啓発を計り、又社会に奉仕せん」などという下りもあり、数年後の台湾人学生を中心とする活動の再開を促した可能性もあるであろう。
- (31) 『台湾青年』90号(1937年1月), 94号(1937年5月)。
- (32) 林朝燦「台湾初期YMCA活動史」。
- (33) 『聯盟報』4, 1934年1月22日
- (34) 『台北市中華基督教青年会四十年史』参照。
- (35) 陳瓊瑤は太平境教会伝道師在職中の1920-23年、林茂生による台南YMCA設立に協力を提供したことが、「太平境馬雅各紀念教會教會歴史年譜」(<http://tpkch.dyndns.org/weblink/record/百年紀事.htm>)に記載されている。また、相良朝彦「台湾素通り期」によれば、1922年当時台南YMCAは既に存在していた。
- (36) 林柏維『台湾文化協會滄桑』(臺源出版社1993年6月), 158-159。鄭任智『日本統治時代における台湾の郷土教育とその多文化教育考察』早稲田大学提出博士論文, 第四章, 119, 引用参照。
(http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/34829/10/Honbun-5258_07.pdf)
- (37) 羅福全『台湾論』その4 序文 近代化と知識人の誕生 (<http://rinnkennryou.blog24.fc2.com/?mode=m&no=478>), 2012年9月閲覧。
- (38) EPM宣教師が1920年代半ばの台南YMCAを「名前だけ」の存在と言及していることから、宣教師が信仰活動と認識するようなものはほぼ皆無だったと考えられる。*The Christian Movement in Japan, Korea, and Formosa* (1926), 254.
- (39) 『開拓者』17-2 (1922.2)。
- (40) MacMillan, 70.
- (41) 林朝燦「台湾初期YMCA活動史」。
- (42) Band, Edward. *Reminiscences*, Chang Jung Boys Middle School, Tainan, 1956, 37-38. なお、バンドによれば、青年会の活動は後に黄彰

輝のリーダーシップのもと大きな飛躍を遂げたとあるが、本稿で扱った資料からは黄彰輝と戦前のYMCA運動の関わりについて十分に推察できなかつたため、この点については今後の検討課題としたい。

- (43) 林朝榮は特に明記していないものの、この一連の動きは、台南を中心とする南部台湾長老教会に限定された活動であろう。
- (44) 林朝榮「台湾初期YMCA活動史」。
- (45) 黄武東・徐謙信編、頼永祥増訂『台湾基督長老教会年譜』（人光出版社、1995年、以下『年譜』）、266-267頁。なお、劉子祥「青年事工的回憶」では聯盟の発足は1933年とされているが、『年譜』における記述は『台湾教会公報』1932年10月号に依拠しており、『聯盟』3号（1933年10月25日）に掲載された廖繼春の記事「聯盟誕生の日に當りて」には、「台湾基督教青年会聯盟は神の御祝福と諸先輩の多大な御援助を受け呱呱の声を挙げてもう一年になりました」とあることから、設立年が1932年であるのは確実である。
- (46) 楊士養『南台教会史』（台湾教会公報社、1965年）、65頁。
- (47) 黄耀煌「YMCAよ！協同団結せよ！」（『聯盟報』2号、1933年7月）。
- (48) 『聯盟報』3号。
- (49) 劉子祥「青年事工的回憶」。
- (50) 『年譜』266-267頁。
- (51) 「我等何を為すべきか」（『聯盟報』3号）には、教会と聯盟の関係について、「早くも両者対立といふ悲しむべき現象に遭遇せる」と言及されている。その他にも、『連盟報』紙上には、教会関係者が青年会を快く思わなかったことを示唆する文章が散見される。
- (52) 『聯盟報』3号。
- (53) 同上、および劉子祥「青年事工的回憶」。
- (54) 「劉子祥先生事略」、『壹葉通訊』145号（1988年4月）；劉克全編『永遠的劉瑞山』2004年（頼永祥長老史料庫）。
- (55) 「青年会與政治運動」『聯盟報』3号、1933年10月。
- (56) 『聯盟報』3号。
- (57) 劉子祥「青年事工的回憶」。
- (58) 淡水基督青年夏季学校については『聯盟報』3号を参照。
- (59) 劉子祥は1939年の第6回までしか記していないが、『年譜』によると

1940年にも第7回目が開催されている。

- (60) Hugh MacMillan, *Then Till Now in Formosa*, 72-73. 『年譜』 322頁。
- (61) 『聯盟報』 4号。
- (62) 台北市内各青年会代表者懇談会（1935年4月13日）における林朝榮の発言より（『台湾青年』 70号, 1935年5月）。
- (63) 以下、特に明記のない限り『聯盟報』 24号参照。
- (64) 林生「台湾学生YMCAの夏期に於ける計画」（『聯盟報』 2号）。この「林生」はおそらく林朝榮であろう。
- (65) 『南台教会史』, 65頁。
- (66) 劉子祥「青年事工的回憶」。
- (67) 劉子祥「青年事工的回憶」。
- (68) 同上112号, 1938年11月5日
- (69) 『台湾青年』 111号, 1938年10月5日。
- (70) Hugh MacMillan, *Then Till Now in Formosa*, 70-71.
- (71) 1935年の台湾内地留学生数は2185名とされる（上沼八郎「日本統治下における台湾留学生—同化政策と留学生問題の展望—」（『国立教育研究所紀要：アジアにおける教育交流—アジア人日本留学の歴史と現状』 94, 1978年3月, 142頁。）150名という数は筆者による郭馬西ご子息へのインタビューから聞いた人数である。
- (72) 阪口直樹『戦前同志社の台湾留学生—キリスト教国際主義の源流をたどる』（白帝社, 2002年）においても、台湾キリスト教青年の集まりについての言及は皆無である。
- (73) 林茂生「敬甲 廖三重君」, 『台南府城教會報』 第355卷, 1914年10月（頼永祥長老史料庫）
- (74) 『聯盟報』 4号, 1934年1月22日。ミス・ゴールドとは、CPM宣教師ゴールド夫妻（William & Margaret Gauld）の娘で、いずれも1924年にCPM宣教師として台湾へ派遣されたグレッタとフローラ（Gretta & Flora）のうち、台南新樓病院看護長をつとめたグレッタのことを指すと考えられる。
- (75) 『聯盟報』 2号（1933年7月7日）参照。
- (76) 『聯盟報』 3号。
- (77) 人数は最も多い時で140-150名であったとされる（郭馬西ご子息イン

- タビュー)。
- (78) Shoki Coe, *Recollections and Reflections*, 1993: 90.
 - (79) 『台湾青年』126号, 1940年1月5日。
 - (80) 注1で挙げた研究に加え, 台湾人留学生に関する史的研究としては, 紀旭峰『大正期台湾人の「日本留学」研究』(龍溪書舎, 2012年), 阪口直樹, 前掲書, などがある。
 - (81) 留学生数の推移, また, 留学生が東京に集中する傾向があった点については, 上沼八郎, 前掲, 138-142頁, を参照。
 - (82) 田中豊治『アジア社会論への社会的視座: 中国人社会学者・呉主恵の学問と生涯』佐賀大学教育学部紀要43:2 (1996), 4-5頁。
 - (83) 上沼八郎, 前掲, 152頁。
 - (84) 初期留学組の郭馬西や劉青雲らは, 『台湾青年』(台湾民政会)の編集にも関わっていた(紀旭峰, 248頁)。
 - (85) Shoki Coe, *Recollections and Reflections*, 91.
 - (86) 杜謙遜「台獨女大俠—〈東京歐巴桑〉廖蔡綉鸞」(頼永祥長老史料庫); 呉主恵『教育と研究—教壇生活四十年回想録』(東出版寧樂社, 1977年), 112頁。
 - (87) MacMillan, 72.
 - (88) Edward Band, “Educational Problems in Formosa,” *Christian Movement in Japan*, 1932, 176.
 - (89) Shapiro (2010), 33.
 - (90) *Christian Movement in Japan*, 1929 & 1932.
 - (91) たとえば, 「全臺灣基督教信徒大会要項」(1935年11月)[大親睦会のしおり]参加者リストに, 劉子祥らの名前は見当たらないため, 聯盟中心メンバーは1935年の大親睦会にも参加していなかったと思われる。
 - (92) 「日本基督教台湾教団」成立の過程と問題点については, 高井ヘラー由紀「日本統治下台湾における台日プロテスタント教会の〈合同〉問題——一九三〇年代および一九四〇年代を中心に——」(『キリスト教史学』第59集, 2005年7月, 109-141頁)を参照。

